
竜に愛されし鎮め姫

春秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜に愛されし鎮め姫

【Nコード】

N8488B

【作者名】

春秋

【あらすじ】

竜が支配する世界。誰もが竜に怯え暮らす世界。人は己の罪を忘れ竜を恐れ、憎む。竜は狂い、元凶たりし人間を憎む。唯一竜に愛されし少女は世界を旅する。1/21「悲しき涙」を大幅改訂しました。

噂（前書き）

他の話を更新しないのに新しく初めてしまいました。
少しでも楽しんでくだされば幸いです。

噂

優れた知恵と永き寿命。巨大な体を覆う硬い鱗。鋭い爪。甚大な魔力。

世界を支配するのは、強大で残酷な竜。

時折、人里に降りては癒えぬ傷痕を残して行く。

幾多の者が竜に挑み、死を迎えた。

人が逆らうなど愚かだというように。

残酷な死を。

人々はただ怯え、祈ることしか出来なかった。

どれだけ国が発展しようとも、竜の脅威が消えることはない。

どれだけ力のある精霊使いも竜を追い払うのが精一杯だ。

ある時、噂が流れた。

竜を従えし少女がいる、と。

どれ程凶悪な竜も少女さえいれば、おとなしくなる、と。

人々は、嘘だと一笑にしながら、密かに真実である事を願った。

噂（後書き）

人は短命故に過去を忘れ、己の罪を忘れる。

絶望（前書き）

二話目です。今回は割りと早目に更新出来ました。
感想をお願いします。

絶望

町を焼く、炎の海。

つんと人の焼けた臭いが鼻をつく。

吐気を必死に堪えながら、少年は町を走っていた。

「母さーん、父さーん、ヒナー」

幾度も咳き込みよるけながら、足は止まらなかった。

なんで、こんなことになったんだろう。

頭の中はそればかりがよぎる。

今日は、デイルカの町の祭りの日だった。

竜に怯えながらもなんとか一年分の収穫が得られたことを喜ぶ収穫祭があるはずだった。

祭りの日に母親と妹に花を渡そうと少年は決めていた。少し貧しい少年の家では、収穫祭の日でも身を飾る美しい服も飾りもなかった。だから、花で飾りつけようと決めていたのだ。

町から少し離れたところに少年だけの秘密の花畑があった。

朝早く、まだ薄暗い朝霧の中、花畑を目指しひたすらに走った。

花畑に着いた時は既に日が昇り、辺りを照らし出していた。

朝露が日に照らされ、幻想的な光景が目の前に広がっていた。

しばらくの間、目の前の光景を眺めたあと、周りはずいぶん明るくなったことに気付き、我に返った。

「しまった、急がないと祭りに間に合わなくなる」

慌てて綺麗な咲きかけの花だけを選び出し、家からこっそりと持ってきた籠を一杯にした。

籠は歳の割りに小柄な体には重かったが心は軽かった。

これで母さんとヒナを飾ってやれるな。

父さんには怒られるだろうけど、母さんとヒナは喜んでくれるだろうから、いいや。朝走った道のりを今度は花を落とさないように歩いた。

頭の中に花に喜んでいる母親と妹の笑顔が思い浮かび、自然と足並みが早くなった。

町まであと少しという所で異変に気付いた。

町から幾筋もの真っ黒な煙が立ち上っていた。

収穫祭で賑わっているはずの町から、歓声も賑やかな声もしなかった。

嫌な予感が胸の中をよぎり、消えない。

「母さん、父さん、ヒナ」

籠を落とした事にも気が付かず、町に向かって走り出した。

頼む、間違いであってくれ。俺の勘違いであってくれ。

「あつ、母さん、父さん、ヒナ」

荒い息遣いの中、ようやくたどり着いた町は炎の海だった。

呆然と瓦礫の山と化した町を目にし、止まっていた足は一步、二歩と頼りなく歩みはじめた足取りは、やがて家に向かって走り出した。

カラア、ン。

不意に後ろの方で音がした。

その音は妙にはっきりと聞こえた。

ひっきりなしに響き渡る建物が焼き崩れる音すら、耳に入らなかったというのに。

足を止め、ゆっくりと後ろを振り返った。

目の前に見えたのは、濁った深紅の鱗に隙間なく覆われた、巨大な竜。

予想が当たったことに絶望した。

竜に襲われた町で生き残った者はほんの一握りに過ぎない。

必死に足を動かそうとしても、恐怖と疲労で動かない。

濁った黄色の瞳に睨まれ、目を反らす事も出来ず、凍りついた。

大きく開かれた竜の口から赤い炎が見え、死を覚悟した。

これで母さん達のところに行ける。

絶望の中、その思いだけが溢れ、ゆっくりと目を閉じた。だが、熱く身を焦がす炎はいつまでたっても襲っては来なかった。

不思議に思い、恐る恐る目を開ける。

そして、目の前に、竜との間に立つ少女を見つけた。

絶望（後書き）

かつて犯した罪は消えることなく、人を苛み、新たな罪を犯させる。

竜鎮め（前書き）

久しぶりの投稿です。待ってて下さる方がいらっしやったら嬉しいです。出来たら、感想をお願いします。

竜鎮め

「駄目よ、竜。やめなさい」

優しい凜とした声が辺りに響いた。

紺色の長い髪と純白の膝まで被う上着が熱風にあおられ、なびく。
巨大で残酷な竜を隠することなく、深みのある藍色の瞳が見据える。

「竜、竜。私の愛しい竜」

少女は少年を振り返る事なく、愛しげに悲しげに落ち着かせるように繰り返す何度も竜に囁き続ける。

ぺたり。

死ななかったことにぶつりと緊張の糸が切れ、少年の足から力が抜け、座り込んでしまった。

同時に目の前の光景が信じられず、目を見張る。
人など塵としか思わないはずの竜が、たった一人の少女に頭を下げているのだ。

有り得ない光景に、少年はただただぼうけたように逃げる事すら思いつかずに見続ける。

ふと真つ白な頭の中に幼い妹の声が響いた。

「あのね、お兄ちゃん、竜を従えし少女って知ってる？その人さえいたら、どんな竜もおとなしくなるんだって」

あの時、自分はそんなの嘘だと笑った。

そんな自分にぽつりと妹は呟いた。

本当だったら、いいのにね。

ヒナ、笑ってごめん。あの噂は本当だったよ。

そう、呟いたのを最後に少年の意識は遠ざかっていった。

少女は細く白い腕を伸ばし、臆する事なくたやすく自分を丸呑みに出来る巨大な竜の顎に触れた。

「竜、私の竜。あなたに名を。邪なるものからあなたを守る名を。あなたの名は」

ゆっくりと藍色の瞳を閉じ、竜の顎に口付ける。

「あなたの名は、椿」

高らかに名を告げた少女の声に名を与えられた竜は、歓喜の声を上げた。

辺りに響き渡る歓喜の声は地を揺らし、炎に焼かれるも未だ残っていた建物を全て崩壊させた。

気を失った少年の元にもいくつか大きな建物の破片が降り注いだ、いつの間にか現れた、二十歳程の青年に助けられ、無事だった。

少女が静かにけれど嬉しさと優しさに満ちた穏やかな笑みを浮かべながら向けられた視線の先では、椿の姿に変化が訪れていた。

歓喜の声を上げ続ける椿の体から、黒く濁った煙の様な物がゆらゆらと沸き上がる。

けれど、沸き上がる端から真っ白な焰が飲み込む様に煙りを焼き消していく。

黒く濁った煙の様な物が椿の体から沸き上がる事に、濁った深紅の鱗が深みを増した美しい深紅に変わっていく。

濁っていた黄色の瞳も澄んだ金色に変わった。

金色の瞳に浮かぶのは、さっきまで浮かんでいた殺意ではなく、穏やかで豊かな知性を示す光。

濁った黒い煙りが消え、次いで白い焰が消え後には、先程までの狂暴で残酷な竜の姿はなく、そこに残されたのは神々しいまでの威厳と清らかさすら感じさせる偉大なる竜の姿のみであった。

竜鎮め（後書き）

何故に竜は狂うのか？

願いと決意（前書き）

またまた遅くなりました。

これから気まぐれに更新だと思えます。

願いと決意

穏やかな澄んだ金色の瞳が少女を見つめた。
少女もまた臆することなく、椿を見つめた。

「私が分かる？ 椿」

「いいえ。私には貴方が誰だか分かりません。ですが、私の魂はあなたが誰か知っています。あなたが信頼に値することも。どうか、あなたの名前を教えて頂けませんか」

申し訳なさそうに恥じ入るようになだれながらも、乞うるようにセリナを見つめた。

「私は、セリナ。かつて祝福を受けし魂をこの身に宿す者」
椿の様子に柔らかな笑みを浮かべた。

「セリナ様」

そつと己に刻み込むようにうやうやしく名を呼んだ。

「セリナでかまわないわ。様はいらないわよ、椿」

「ですが、あなた様は」

「椿、私は私よ。かつての私が犯した過ちを償っているだけ。」

「あれはあなた様の罪ではございません。愚かなる人間が犯した罪です」

今までとは違う強い口調で椿は怒りを露にした。

「椿。私も人間であり、罪の一端を背負っているの。今、それを覚えているのは、私だけ。それにね、王を取り戻せるのも私だけ。そしてあなた達に取り戻してもらいたいよ。偉大なるその姿を。それが私の唯一の望みであり償い。誰よりも優しく気高きあなた達を狂わせてしまったのだから」

なだめるような優しく悲しげな声。けれど、同時に声の中には強く凜とした響きがあった。

前を向くセリナから感じ取れる光を椿は嬉しげにまた眩しげに見つめた。

歡喜と共に。

「椿、今のあなたなら、行くべき場所が分かるわね。里にいたら、名乗りなさい。それが鍵となるから」

椿は深々とセリナに頭を下げる。

「本当にありがとうございます。セリナ様のおかげで正気を取り戻す事が出来ました」

セリナは軽く首を横に振る。

「私は大したことはしてないわ、椿」

「私にとっては、本当に助かったんです。それを否定しないで下さい」

諭す椿にセリナは笑みを浮かべた。

「そうね。ありがたく受けとるわ、椿。そうそう、皆に伝えて。あと、二十日ばかりしたら戻るからって」

「はい、分かりました。どうぞお元気で」

心配そうな椿に明るく笑いかけると、セリナは頷いた。

「気を付けるわ。あなたも気を付けてね、椿」

「はい。おかえりを楽しみにしてます。どうかセリナ様をよろしく願います」

最後に深々とセリナの後ろに立つ人影に頭を下げると美しい翼をゆつくりと広げた。

二度、三度と翼を動かすと大空へと舞い上がった。

「あなたに幸あらんことを」

去り行く椿を見つめ、セリナは呟いた。何かを堪えるように空を見つめ続けるセリナの名を冷たい声と呼んだ。

願いと決意（後書き）

少女の罪と人の罪。
償うべきはどちら？

仲間（前書き）

久々ですね。読んで下さる方、ありがとうございます。

仲間

「セリナ」

少女は自分と呼ぶ声にキュツと唇を噛むとさつきまで浮かべていた辛そうな表情を消し、振り返った時には明るい笑みを浮かべていた。「なに？メノ？」

「生き残りはコイツだけだ。他は居ない」

一切の感情が込められていない声。

セリナの名を呼んだのは、20歳ほどの青年。

瞳は黒味を帯た深紅。

髪は金の混じった燃える炎の様な紅。

鮮やかな色彩を纏いながらもどこか冷たい刃を思わせ、近寄りがたい雰囲気が漂う。

「そう。ありがとう、メノ」

悲しげな笑みを浮かべ、少年を見るセリナにメノは僅かに不機嫌そうにした。

「メノ、笑顔、笑顔」

突然、辺りに明るい声が響いた。

「ラン」

「ほら、セリナも笑いなさいって。一人だけでも助かったんだから」ランと呼ばれたのはどこことなく色気の漂う妙齡の女性。

肩で切り揃えられた銀の髪に鮮やかな緑の瞳。

活動的な性格を表すように、長ズボンに半袖の上着と実に動きやすい格好をしている。

「ほら、笑って。あなたは精一杯やってるんだから。それにね、あなたは否定するけど、あなたに罪はないのよ。始めに過ちを犯したのは人の欲なんだから。あなたはその犠牲になっただけ」

じつとセリナの目を見つめ、そう言い切った。
「ありがとう、ラン。」

微笑むセリナにランは嬉しそうな笑みを浮かべた。
メノの雰囲気も僅かに柔らかくなった。

「セリナ」

「ラギ」

突然、声と共にセリナに飛び付いて来たのは、12、3歳ほどの少年。

短い銀の髪に楽しそうな少し垂れ気味の銀の瞳。

見る者が思わず目を細める愛らしい容姿をしている。

「ラギ、急に飛び付かないで。危ないでしょう」

しゅんと下を向き、ラギは上目でセリナを見る。

瞳を潤ませ、悲しげにする。

「セリナは、僕のこと、嫌い？」

誰もが慌てて否定し、必死に慰めるほど、愛らしく儂げな姿。だが、セリナ達には通じなかった。

「そんなこと言ってないでしょ。危ないからやめろって言ってるの。だいたい、私にそれは効かないわよ」

呆れたようにセリナは言った。

「はい」

なぜか楽しそうにラギは返事をした。

「ねえ、セリナ。早くここから出ようよ。お腹すいた」

ぐいぐいとセリナの腕を引っ張る。

「分かったから、手を離して」

痛いのかセリナは眉をひそめた。

「はい」

セリナの腕を離すと、ぱたぱたと走り出しす。走りながら、振り返った。

「僕、先に行って場所探しておくね」

返事も待たずにラギは走り去った。

「ラギったら、元気ね。見習わなきゃね」

苦笑するとセリナはぐるっと目に焼き付けるように周りを見渡す。

「行こっか」

しばらくしてセリナはメノとランに晴れやかに笑い掛けた。

諦めはしない。自分を許すことも出来ない。それでも一緒に居てくれる者がいる。

だから、笑おう。

仲間（後書き）

人が忘れた罪を一人背負う少女と共に旅するのは、少女に罪無きことを知る者。

悲しき涙（前書き）

亀より遅い更新です。

出来たら、感想を下さい。誤字脱字報告でも構いません。

悲しき涙

闇夜の森の中で焚き火を囲むいくつかの人影。
その内の1つが横になっており、時折心配そうに覗き込む人影があった。

「うん」

横になっていた人影が、話し声に促されるように軽い唸り声を上げる。

「あつ、起きた？ご飯出来てるけど、食べない？」

（だれ、だっけ？それに、布団こんなに堅かったけ？）

聞き覚えのない声に内心首を傾げ、違和感を感じながらゆっくりと起き上がる。

寝起きで霞む目を擦り、周りを見渡した。

目の前にあるのは、闇を照らす暖かな焚き火。

周りにいるのは、見覚えのない人達に見覚えのない場所。

「ここ、どこお？」

今だ寝起きのいくぶんぼんやりとした頭で尋ねる。

「ここは、森の中よ。ねえ、何があったか、覚えてる？」

自分よりいくつか年上の、凜とした清廉な雰囲気を纏った嫌がおうにも目が惹き付けられる綺麗な少女が尋ねてきた。

みとれながら、何があったけ？と考え出す。

（確か、お祭りだから、母さんとヒナの為に花を、取、りに、行つて）

「あつ、街が焼けてた。竜が、街を襲つ、て」

徐々に記憶が戻って来る。

焼け爛れた街。

辺りに漂う人の焼ける臭気。

沸き上がる不安と絶望。

そして、自分を見た、竜の濁った黄色の瞳。

その瞳を目にした途端、体が震え出し動くことが出来なかった。頭も真つ白になり、ただただ竜の姿に怯えることしか出来なかった。竜が口を開き、灼熱の炎が迫ってきた時もただ見つめるだけだった。助かった後でもいい出すだけで、知らず知らずの内に体が震えてくる。震えと共に感じた寒気に思わず、自分の体を抱き締める。

それでも、震えも寒気も治まらなかった。

ただただ震える少年の小さく細い体をセリナは切なげに見つめた。未だ成長途中の未発達な少年は、本来なら両親に守られて笑っている筈だった。

なのに、ほんの一時町に居なかった、たったそれだけで守ってくれる両親も家族も亡くしたのだ。

それだけではない。

今まで育ってきたであろう町も人々も全て失ったのだ。

それに、深い絶望と決して人が勝つことの出来ない絶対者に遭遇する恐怖も味わったのだ。

恐らく、それは生涯少年を事あるごとに苦しめることになるだろう。竜を目にした大人がその恐怖に耐えきれず、正気を失うことも折角助かった自らの命を絶つこともあるのだから。

そして、守る者もない少年は、孤独を味わう事になるだろう。

これから先の事を考えるともしかしたら、あの時死んでいた方がたつた一人生き残るよりも楽な事だったかもしれない。

そんな思いが一瞬セリナの頭をよぎった。

その考えをしりのぞけるように、一度強く俯きながら首を振る。

そうして、前を見つめた先には自分を強く抱き締め、尚震え涙する少年。

躊躇いがちに、そつと伸ばされたセリナの両腕が少年の体に近づいていく。

伸びた手が少年に触れる事を一度躊躇った後、ゆっくりと少年の体を抱き締めた。

止まらない震えと恐怖に、耐え切れず狂ってしまいそうになったその時、暖かな何かが体に触れ微かに甘い香りが広がった。

その温もりと香りが、冷え切った少年の体と心に心地よく、ふっと安堵のため息を付いた。

「大丈夫よ、大丈夫。ここに、あなたを傷付ける者はいないわ」

優しい声が耳元で響く。

その声の示す内容がが真実であると、なぜか疑いもなく確信できた。ああ、ここに竜は居ないんだ。

ようやくそう思うことが出来、今度は安堵の涙が流れ出した。

そうして、ひとしきり涙した後家族や町の人々の事が思い出された。あの惨状を見た後では、助かっているとは思えなかった。

自分が助かった事さえ、奇跡に近いのだから。

何せ、竜に襲われて助かった者は極僅かしかないのだ。

ほとんどの場合、生き残るものは居らず、全滅しているのだから。もし、花を摘みにいてなければ、彼も死んでいたのは間違いない。

それでも、震えるかすかな声で、一縷の希望を込めて尋ねた。

「母さん達、は」

抱きしめる腕に僅かに力が入った。

それだけで、生き残っているのが自分だけだとわかった。

それでも、信じたくなくてただじっと少女の顔を見上げた。

その視線に、少女の綺麗な藍色の瞳が揺らいだ。

揺らいだ瞳は、すぐに静かな水面のように凧いだ。

そうして、静かに紡がれた言葉は少年の希望を打ち砕いた。

「……あの街で生きていたのは、あなた、だけ」

最後の望みが絶たれ、最早溢れ出す涙を止める手立ては少年にもせ

リナにもなかった。

むせびなく泣き続ける子供を抱きしめることしか、セリナには出来なかった。

それでも、謝ることは出来なかった。

それは、共に旅をしてくれるメノ達の言葉と想いを裏切り、罪のない椿を責めることになるから。

それに何よりもセリナは決めていた。

心の中は謝罪でいっぱいでも、表には出さない。自分の罪は許されるものではないから、と。

謝罪の念を表に出せば、メノ達が否定してくれることは分かりきっている。

それが分かっている尚、自分の罪悪感を薄めるためにだけ口にはすまい、と。

「ありがとう、生きててくれて」

それだけしか、ささやくことが出来なかった。

少年はセリナの言葉にいつそう声を上げ、泣いた。

泣いて泣いて、目が赤く充血し、瞼が熱を持ち腫れた頃に漸く涙が止まった。

その間ずっと抱きしめてくれたセリナに、恥ずかしいのか少し頬を赤くし、かすれた声で少年は、礼を述べた。

「…ありがとう」

絶望を味わっても尚、礼を忘れない少年の様子にセリナは思わず微笑んだ。

「気にしないで。それより、喉、渴かない？」

腕の中でこくりと少年が頷くのを確かめる。

あれだけ、泣き続けていれば、喉が枯れ声が掠れるのも当然だった。セリナは顔を上げ、少し後ろを向いた。

そこには、ランが焚き火を背景に座っていた。ランの瞳には、セリ

ナ達を氣遣う光が浮かび、心配そうにセリナを見やっていた。

ランの様子にセリナは、全てを慈しむかの様な優しい笑みを浮かべて見せた。

その笑みには、ラン達が心配していたような暗さはなく、釣られるように笑みを見せる。

セリナは、ランの笑顔を見ると明るい声を響かせた。

「ラン、白湯に蜂蜜を溶かしたのと濡らした布をちょうだい」

「了解、っと」

セリナの声にランは予め用意しておいた布を冷たい水で濡らし、セリナに手渡す。

その一方で、セリナを独占する少年を未だ不機嫌に睨むメノとラギをなだめる。

実の所、メノとラギは少年がセリナに抱きついていている間、幾度となく引き離そうとしていた。

それを食い止めていたのは、セリナの悲しむ顔は見たくないという思いだった。

最もそれも二人が行動に移そうとする度に、ランが宥めたからこそではあるが。

「はい。これで目を冷やして。痛いでしょう」

「ありがとう」

礼を言っただけで受けた布は熱を持っていた顔に、ひんやりと冷たき気持ち良かった。

悲しき涙（後書き）

目覚めた少年に突き付けられるのは、残酷な現実。
過去に罪を犯せし事を忘れた償いは未だ止まることはない。

名前（前書き）

更新は不定期で亀より遅いですね。

次回は、今回よりは早くお届け出来るよう、頑張ります！

名前

「ねえ、名前を聞いてもいい？」

はいつとコップを渡しながら、セリナが言った。

喉を優しく潤す温かく甘い白湯を飲みながら、コクツと頷いた。

「良かった。私はセリナ。あっちの無愛想で冷たそうなのがメノ。
で。小さいのがラギ。こっちの美人さんはラン」

セリナの紹介の仕方にランは微笑し、ラギとメノは更に不機嫌になった。

だが、そんなことは気にしないセリナは少年に目を戻した。

「僕は、ヤイト」

「ヤイトか。ヤイトって、呼ばすてにしていいい？あつ、私のことも呼ばすてでいいよ」

明るいセリナの声に促されるようにヤイトの顔にも弱々しい笑みが浮かんだ。

それにほつと安心したような笑みをセリナは浮かべた。

「ヤイト、お腹空かない？ちょうどスープが出来たとこだし。メノが作ったのは、美味しいわよ」

ヤイトから離れ、スープを注ごうとしたが、ヤイトの不安そうな表情に気付き、動きを止めた。

ヤイトの恐怖は近くに人のぬくもりがあることで緩和されていた。一瞬、悲しげな笑みを浮かべると、セリナはヤイトの隣に座り直した。

「ラン。スープ二人分ちょうどい。足、痺れちゃった」

セリナが座り直すとヤイトは嬉しそうに安心したように笑った。

「りょーかい」

ランがヤイトに手渡した具がたっぷりに入ったスープは確かに美味しそうだった。

ゆらゆらと温かな湯気が立ち上り、いい匂いが鼻を撫る。

朝から何も口にしていなかったヤイトは、思わずごくりと喉を鳴らした。

だが、セリナを初め、ラン達が未だに食べて無いことに気付き口を付けられなかった。

「遠慮しないでいいよ。ヤイトはお客様なんだから。それにまだたくさんあるんだから」

皿を抱えたまま、食べようとしないヤイトにセリナは声をかける。それでも、口を付けようとしないヤイトをみて、先にスープを食べ出した。

美味しそうに食べるセリナにつられるようにしてヤイトも食べ始めた。

「……美味しい」

「でしょう？メノの特技はこれだけだもの」

ホツと安心したような晴れやかな笑みをセリナは浮かべた。

「……悪かったな」

少し不貞腐れたような声が炎の向こうから聞こえてきた。

メノの様子にくすくすと笑いながら、セリナはメノをなだめにかかった。

「褒めてるのよ？メノ。私はあなたの作ってくれた料理が一番好きよ」

「……それなら、いい」

焚き火に更に薪をたすメノの顔は僅かに赤くなっていた。それが、火の照り返しで無いことに気付いたランがぷつと吹き出し、笑い始めた。

名前（後書き）

命まで失いかけた少年。
それを救ったのは、人間から裏切られた少女。

勝敗（前書き）

今年初の更新です。

今年は、去年よりは多く更新していくつもりです。

目標は、最低月一です。

頑張りたいです。

勝敗

「あつはは、相変わらず、メノは可愛いわね。セリナにだけよね、そんな可愛い反応するのわ」

ギロツと冷たい目で睨んでくるメノを恐れることなく、ランは笑い続ける。

「しょうがないよ、ラン。メノはまたまだ子供なんだから。からかったら、ダメだよ」

堪えきれない笑みを浮かべながらも、ラギがメノを庇う、ように見せかけ、からかう。

「だったら、笑うなラギ。第一、俺は子供じゃない」
無然とした不機嫌の声にますますランとラギの笑いは深くなる。

「知ってる？メノ、子供ほどそんな事言っただよ？」

ラギは笑いながら、更にメノをからかう。

端から見れば無表情のメノだが、セリナ達からしてみれば、口惜しそうにしてる事が良くわかる。

「やられたわね、メノ。お姉さん達に勝とうなんて、まだまだ無理ね、その調子じゃ」

ニヤニヤとからかってくるランにボソリとメノが呟いた。

「誰が姉だ。いい年だろうが」

小さく呟いたに過ぎなかったが、それを聞き逃すランではなかった。

「ふん、メノってば、そんなこと思ってたのね」

につこりとそれこそ何も知らなければ、極上の笑みをとしか思えない笑みでランは笑った。

そう、何も知らなければ思わず魅とれてしまう綺麗な笑み。

だがそれは、知る者が見れば、ランの怒りの表情でしかない。

「あゝあ、御愁傷様。メノってば、墓穴掘る癖、直しなよ。どうせ、勝・て・な・い・んだし」

からかうラギの言葉にメノは答えるどころではなかった。

「さあ、メノ。覚悟はいいわね。どうしてあげようかしらね」

にこりと更に笑みを深くしながらも、その細い手は、パキパキと恐ろしい音を立てている。

表情は変わらないメノだったが、顔は青ざめ脂汗が流れている。

セリナに助けを求めようとするが、その前にガシツとランの両手がメノの顔を掴んだ。

「さあ、メノちゃん。お・姉・さ・んと一緒に楽しく遊びましようか？」

全身を震わせ、必死に逃げようとするメノだが、体格では劣るランの手がガツチリとメノの顔を掴み動くことが出来ない。

暴れるメノに何を思ったのか、ニィッコリとメノの顔を覗き込むようにランは笑った。

そして、優しい声でメノの耳元で囁いた。

「心配しなくても、大丈夫よ。一生のトラウマになるぐらい、楽しい思いをさせてあ・げ・る」

ランの言葉が聞こえたのか、ラギも楽しそうな笑みを浮かべた。

「良かったね、メノ。うらやましいよ」

「だったら、代わってやるよ」

メノの切羽詰まった声には、ラギは実に楽しそうに首を振った。

「残念だけど、僕なんかメノの代わりは務まらないよ。若輩者だからね、僕は。まあ、セリナ達の事は心配しなくていいから、思う存分楽しんで来てよ。僕は留守番してるからさ」

「そうよ。観念しなさい、メノ。今夜は寝かせないわよ。」

フフフ、と楽しげな笑いと共にランはメノの首を掴み、何処かに去っていく。

一点の曇りもない無邪気そうな笑顔でラギは二人を見送る。

「いつてらっしゃい、楽しんで来てね」

「お土産、楽しみにしててね」

ここで、それまで黙々とスープを飲んでいたセリナが遠ざかって行

く二人に声をかけた。

「明日は、朝早いから早めに帰ってくるように。遅れたら、置いていくからね」

セリナの声が聞こえたのか、ランが遠くで手を振ってるのが見えた。「これで、よし」と

1つ頷くと、呆氣にとられているヤイトにセリナは、笑いかける。

「気にしなくて大丈夫よ、ヤイト。ランは加減を知ってるから。それに、いつもの事だしね」

どこか呆れたように言うセリナに、ラギも苦笑する。

「しょうがないよ。メノは、まだまだ子供で墓穴掘る性格だからね」ラギの答えにセリナも苦笑する。

二人の会話にヤイトも釣られて苦笑する。

ヤイトがスープを食べ終わったことを確認すると、軽くセリナは背を伸ばした。

「二人とも今晚は帰ってこないし、ヤイトも疲れただろうし、もう寝ようか」

それにこくりとヤイトも頷いた。

「じゃ、寝る準備しておくから、ヤイトは茶碗片付けてくれるかな？」

ラギの声に頷くと、茶碗と明かりを持ってすぐ近くの川にヤイトは向かった。

勝敗（後書き）

精神と外見は同じ時を過ごす。
されど、同じように成熟していく訳ではない。

竜も人も。

垣間見えた本音（前書き）

初っぱなから、目標を破りすみません。
もうちょっと頑張りたいです。
待ってて下さった方、本当にすみません！

垣間見えた本音

「で？」

「何？」

寢床の準備をしながら、セリナは不機嫌そうにとぼけるラギを睨みつけた。

「何か言いたいことがあるから、ヤイトを行かせたんでしょう。わざわざ一人になるのを怖がってる子を！」

セリナの言葉にラギは、不思議そうな表情を浮かべる。

「そう？あの子、素直に行ったよ？怖がってる風には見えなかったけど？」

ラギの言葉にセリナは棘を含んだ声を出す。

苛立ちを表す様に寢床を用意する動きも荒立たしい。

「今日会ったばかりの、しかも迷惑を掛けたと思ってるあの子が！私達の頼みを断る訳ないじゃない！そこまで分かってて頼んだんでしょ！はぐらかさないで！」

セリナの言葉にラギはそれまでのからかうような態度と明るい表情を一変させる。

その愛らしい顔に一切の表情を浮かべず、感情を含まない冷たい声でラギは言う。

「分かってるんでしょう、セリナ」

「……………」

顔をしかめたまま俯いた、セリナの沈黙が答えだった。

「……ヤイトをどこまで連れて行くのか、でしょう」

自分が答えるまで沈黙が続く事に耐えきれず、か細い声でセリナは呟く。

それに、ラギは正解だと言うように無邪気な天使のような笑顔を浮かべる。

そして、唐突にぎゅっとセリナの背中にラギは抱きつく。

そのままの体勢で、ラギはセリナの耳元でどこまでも優しく甘い声で囁く。

「セリナ、あんな子とつとどこかに放り出せばいいじゃないか。あの子を見るたびに、セリナは苦しむでしょう？セリナが出来ないなら、僕がしてあげるよ」

「ラギ」

ラギの言葉にセリナは悲しげに名を呼ぶ。

セリナの声にラギは可笑しそうに笑う。

「セリナが苦しむ必要はないんだよ。悪いのは、全部人間なんだからね」

ラギは、最後の言葉にだけ限らない憎しみを込める。

改めてラギの憎しみと怒りの深さを感じ、数瞬セリナは言葉を失う。ごくり、と無理やり喉を潤すと、僅かに掠れた声がなんとか出た。

「…私も人間よ、ラギ」

セリナの言葉にラギは更に可笑しそうに笑う。

「セリナは確かに人だよ。だけど、君は、君だけが誰よりも竜に近しき者だよ。そして、竜を狂わせたのは、君じゃない」

完全にセリナの手は止まっていた。

「竜を狂わせたのは…私だよ、ラギ」

セリナの細い声に宿るのは、決して消えることのない罪への自責の念。

「君に罪はないよ。君にだけはね。罪深きは、全てを忘れ、被害者ぶる人間だよ」

「でも！」

ラギの声を振り払うようにセリナは首を振り、言葉を続けようとする。

だが、ずっと背中から暖かな重みが消え、寒さを感じた。

それがセリナには堪らなく寂しく感じられた。

「早く、寝床作っちゃおう、セリナ」

さつきまでの甘い声とは違つ、子供らしい高めの明るい声がセリナを促す。

「そうね」

それにセリナも頷き、止まっていた手を動かす。

ラギの態度にヤイトが近くまで来ていることを悟ったからだ。

やがて、寢床が出来上がりかけた時にヤイトの足音が聞こえ、ヤイトの姿が現れた。

「遅くなつて、すみません」

「そんなことはないわよ。寧ろ、早いぐらいよ。まだ、寢床も作り終わっていないわよ」

息を切らせながら、勢い良く姿を表したヤイトにセリナは笑い掛ける。

責める様子のないセリナの様子に、ばれないようにヤイトはそつと安堵のため息をついた。

ヤイトにとって、暗い森の中で一人になることは怖くて仕方がないことだった。

それでも、自分を助け世話をしてくれたセリナ達からの頼み事を断るなど考えられなかった。

けれど、少しでも一人でいる時間を減らす為に急いで茶碗を洗った。暗い森の事を考え無いようにしていると、ふと疑問が沸き上がって来た。

（あの時、どうして僕は死なずにすんだんだろう？あの竜の火は、間違いなく僕を目掛けていたのに）

ヤイトの記憶は、竜がその大きな口を開け火を吐く所で途切れていた。

その為、自分が傷一つなく助かった事が不思議で仕方がなかった。だが、セリナ達にその事を尋ねる気にはなれなかった。

聞けば、何かが終わってしまうような気がして。

（助かっただけでも、有難いことだしね）

ヤイトはそう、無理やり自分を納得させていた。

そんな事を考えている内に数が少ない事もあり、茶碗を洗い終わっていた。

駆け足でセリナ達の所に戻る。

木々の隙間から、こぼれ見える焚き火の灯りにほっと安堵の溜め息がこぼれた。

街を焼き払った恐ろしい火ではあったが、ヤイトの中に火への恐れはない。

それは、より大きな竜への恐怖心に打ち消されていた。

安堵の思いは、セリナ達の顔を見た時に更に強くなった。

ヤイトが溢した溜め息に気が付かないふりをし、セリナはヤイトに完成した寢床に入るように促した。

「ヤイト、もう遅いから寝なさい。今日は、色々あったから疲れでしょう」

セリナの言葉通り、ヤイトは疲労を感じていた。

しかし、セリナの言葉に従って休む気にはなれなかった。

（でも、さっきまで休ませてもらったし、見張りとかも必要だよね？それに、寝たら…）

考え込むヤイトの様子にセリナは少し悲しげな笑みを浮かべる。

ヤイトが寝るのを恐れる気持ちも分かるからだ。

だからといって、ヤイトの疲労も分かるだけに寝てもらわない訳にもいかない。

明日は、次の町には着くまで歩き続ける事になる。その為にも体力の回復は欠かせない。

それでも、セリナはヤイトを急かす事もなく見守っていた。

「セリナさん、僕はまだ大丈夫です。眠くないですから、先に休んで下さい。その間、火の番をしますから」

「セリナで構わないわ、ヤイト。ヤイトの気持ちは嬉しいけど、駄目よ。寝ないと体が持たないわ。次の町まで歩き続けなきゃいけないんだから」

「でも、」

尚も躊躇いを見せるヤイトにラギが天使のような笑顔を浮かべ、寝るように促す。

「ヤイト、火の番は僕がするから、君は休んで。明日は早目に出発する予定だから」

しかし、ヤイトは自分と同じくらいの少年に言われて素直に頷けず、眠ろうとはしない。

動こうとしないヤイトにラギは内心腹立たしくて仕方がない。

その表情には現れていないラギの不機嫌そうな様子に、セリナは小さなため息を溢す。

そして、ヤイトの手を掴むとグイッと引き寄せる。

「わあっ！」

「ヤイト、今日はまず休んで。私も一緒に寝るから。火の番を交代する時に起こすから、それでいいって事にして、ね」

自分の体の上に引つ張り倒したヤイトの背中をポンポンと宥めるようにセリナは叩く。

その温かさに、知らず知らずの内に強張っていた体がふつと緩む。力が抜けたのを感じると同時に眠気がゆっくりと押し寄せてくる。

「一緒に、寝よう。ヤイト」

セリナの優しい声と温もりにあがえない程眠気が強くなる。

セリナに子供扱いされるのが心地よくて、抱きしめられたままヤイトの目はゆっくりと閉じられていく。

安らかな寝息がヤイトから聞かれると、セリナは安堵の吐息を溢す。
「良かった」

「何処が？セリナ、とつとその子を離しなよ」
不機嫌なラギの様子に苦笑しながらセリナはそつとヤイトを自分の横に寝かせる。

温もりが離れたことにヤイトは顔をしかめる。だが、セリナが手を握ると再び穏やかな表情に戻った。

その寝顔を見ながら、セリナも横になる。

「ラギ、悪いけど火の番お願いね」
「分かってるよ」

機嫌のなおらないラギにそつとセリナが呟く。

「おやすみなさい、ラギ。大好きよ」

セリナの言葉にピクリとラギの肩が揺れ、ついで小さく返事が返ってきた。

「おやすみ、セリナ」

それにセリナは嬉しそうに微笑むと、目を閉じた。

やがて、二つの安らかな寝息が聞こえ始めた。

ラギはユラユラと揺れる炎を見つめながら、呟く。

「反則だよ、セリナ」

ラギの頬は、炎の照り返しよりもなお濃い赤色に染まっていた。

垣間見えた本音（後書き）

決して消える事のない自責と憎しみ。

全ての始まりは、人が罪を犯した日と憎しみ抱く者は呟く。

自責せし者は、己の存在だと呟く。

朝（前書き）

かなり久しぶりになってしまいました。
待っている方がいらっしやれば嬉しいです！

朝

楽しいな鳥の鳴き声に促される様にヤイトの目がゆっくりと開いていく。

数度、眩しさに耐えきれず瞬いた後昨日までの事を思いだし、ヤイトは思わず硬く目を閉じた。

ヤイトは心の中で、昨日の出来事が夢であるようにと強く願う。だが、辺りに響く鳥の声も体に触れる柔らかな風や布も全てが今までの物とは違う。

あらゆるものが昨日の事が夢ではないと、ヤイトに訴える。

何時も自分を起こしてくれた父の声も朝食を作る母と甘える妹の声も聞こえない。

それ故に昨日までの自分の世界が壊れ、孤独になった事実がヤイトを打ちのめす。

堪えきれずに閉じた瞳から涙が零れ落ちる。

「ヤイト」

優しい声がヤイトの名を呼び、温かい指が涙を拭う。

その声と温かさに促されるようにヤイトは、そろそろと目を開く。

「ヤイト、朝御飯出来ただけど、まだ寝とく？」

涙の事には触れずにいてくれるセリナの優しさが、ヤイトには嬉しかった。

ヤイトは更に泣きそうになりながら、首を振る。

「大丈夫、起きるよ。」

寝起き以外の理由で掠れた声にセリナは何も口にしない。

ポンポンと、軽く毛布の上から叩くと、セリナが離れていく音がした。

セリナの声と温もりが、ヤイトに一人つきりではないと教えてくれる。

込み上げる熱い何かを必死に呑み込むと、ヤイトは起き上がった。

「顔を洗ってらっしゃい、ヤイト。私も一緒に行くから。すっきりするわよ」

セリナの声にヤイトは、ゆっくりと頷く。

焚き火に向かおうとしていた足を、すぐ近くの川に向ける。

ヤイトの後ろでセリナが付いていこうと立ち上がるうとする。

それをラギがセリナの肩に手を掛け、押し留める。

「いいよ、セリナ。僕が行くから。セリナは、朝食の準備をしてて」
「けど」

セリナはラギの人に対する憎しみを知っているから、ヤイトと二人きりにすることに躊躇いを覚える。

セリナの懸念に気付いたラギが宥めるように笑い、耳元で囁く。

「大丈夫だよ、セリナ。あの子を殺したりはしないよ。あの子がセリナを傷つけない限りね」

（あいつが、セリナを傷つけても、簡単に殺しはしないさ。散々苦しんでもらわなきゃ、罪は償えないんだからね）

「ごめんね。セリナには朝食の準備があるから、僕と一緒に行くよ」
先の方で待っていたヤイトにそう言ってラギはにっこりと笑う。

最初の言葉以外黙々と歩くラギに、ヤイトは気詰まりを覚える。

ヤイトとしては、出来ることならラギと仲良くしたかった。

自分を助けてくれた人達であるから、当然好意はある。

それを抜きにしても、同じ年の少年であるから打ち解けたいという

思いも大きい。

だから、チラチラとラギの様子を伺い、何度か声を掛けようとはする。

だが、ヤイトの視線を感じても一切反応しないラギの様子に口ごもってしまふ。

気詰まりに急かされるように、ヤイトは速足になって行く。

ようやく、川が見えると知らずに安堵のため息をついていた。

川で顔を洗い、戻ろうとしたヤイトにラギが口を開く。

「ねえ、君は竜を恨んでる？」

ラギの質問が唐突過ぎて、ヤイトが質問の意味に気付くのにいくばくかの時間を必要とした。

ラギの質問を理解すると、ヤイトは反射的に答えていた。

「当たり前です。竜さえ来なければ、皆はまだ生きてたんだから」

反射的に口にした答えに、ヤイトは己の抱く恨みに気付かされた。

同時に、復讐が無意味である事もヤイトには分かっていた。

あの時、竜と対峙したヤイトだから竜の恐ろしさは十分に知っていた。

あれは人が勝てるものではない、とヤイトの本能が告げるのだから自分が助かったのは、正に奇跡と言える事も分かっていた。

だから、ヤイトを拭いがない無力感と敗北感が襲う。

何も出来ない自分が、情けなくて。

それに、ヤイトは怖いのだ。

自分がかつ一度、竜の前に立つ事を考えると、自然と体が震え出す。家族の仇を討ちたいという思いよりも、なおヤイトに根付いた竜へ

の怖れは大きく深い。

あの、自然の脅威が形を取った竜が、絶対者として君臨する竜が。

（・・・こ・わい。怖い、怖い・・・誰か、助けて）

竜への恨みを口にしながら、その脅威に顔面蒼白になり震えるヤイトをラギは冷ややかな目で見る。

ヤイトの反応は、ラギの予想通りだった。

わざわざセリナから離れた場所で聞いたのは、セリナを傷付けたくなかったからに過ぎない。

そう、ラギはヤイトを手を掛ける気などなかった。

そうする価値すら見えないからだ。

ラギにして見れば、ヤイトなどどうでもいい存在だ。

実際、ヤイトが今ここで死んでもラギは眉一つ動かさない。

最も、セリナが悲しむから、渋々とが助けるだろうが。

ラギが最優先するのは、大切にするのはセリナのみなのだから。

ラギの判断基準は、ひどく分かりやすい。

セリナが傷付くか否か。

それだけなのだから。

セリナが傷付くと分かれば、ラギは即座に原因の排除にかかる。

セリナが、目の前で止めない限りは。

今のところ、良くも悪くもヤイトは想定内の範囲内の反応しかない。それは、セリナを傷付けるものではないから、ラギは歯牙にもかけていない。

もし、ほんの少しでもヤイトがセリナを傷付けるのなら、ラギは躊躇いもなく排除するだろうが。

「もういいよね。もう一回、顔でも洗ったら？そんな顔で帰ったら、セリナが心配するから」

ラギの冷たい、どこまでもセリナ至上の声が未だ涙を流し続けるヤイトの耳を打つ。

未だ恐怖に震えていたヤイトは、のろのろとラギの言葉に、顔を洗い始める。

その身を蝕む恐怖が大き過ぎて、ヤイトは何も考えられなかった。だから、冷たいラギの声にも何の反応も示さず機械的に従ったに過ぎない。

ふん、と小さく鼻を鳴らすとラギはより一層冷たい視線をヤイトに向ける。

慰める気など一切ないラギは、ヤイトの涙が止まったのを確認するとさっさと歩きだした。

ヤイトも覚束ない足取りで、ラギに従う。

「言っとくけど、セリナの前でそんな顔するのは、止めてね。セリ

ナが心配するから。君はお荷物なんだから、心配なんて掛けないでね」

あと少しでセリナの所に辿り着く。

そんな場所で、ラギは急に立ち止まる。

そして、ヤイトの顔を冷ややかに見ながら、本心を告げる。

それにびくりとヤイトは体を震わせた。

朝（後書き）

苛む恐怖こそ人が犯した罪が作りしもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488b/>

竜に愛されし鎮め姫

2010年10月11日23時48分発行